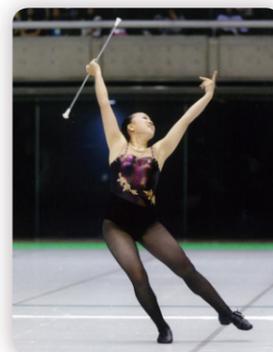


馬場啓一の
RKU
ウォッチング
RKU Watching



● 齋藤真菜 / さいとう・まな

宮城県仙台市生まれ、千葉県市川市に在住。フェアリーズバトンスタジオに所属。
小学6年生から全国大会に連続8回出場し入賞。
今年大学一般部門で全国女子1位。世界大会は14歳で初出場。今年も8月にカナダで開催される世界大会日本代表に3種目選出。団体は高校時代昭和学院バトン部に所属し3年連続全国出場。



Mana Saito × Keiichi Baba

【第27回】

スポーツ健康科学部2年
齋藤真菜さん
(昭和学院高校卒)



バトントワリング日本一

スポーツ健康科学部2年生の齋藤真菜さんは、これまでバトントワリングの各種競技で全国トップの成績を収めてきた。本学期待のホープである。

「6歳のときから始めました。なんとなく、という感じでした。でも小さい頃からダンスとかは好きでしたね。ご近所から教えて下さる人がいて、友達とちよつとやってみようか、という軽い気持ちで始めたのです」

今では最低でも1日3時間、週末には6時間から8時間もの練習を行う。練習の鬼なのだ。「だから休みの日に何かをする、というようなことはないのです。もし好きなことをやるとしたらアウトドアのスポーツでしょうね」

徹底した体育系女子である。でも見た目は可愛い、フツウの女子大学生である。

「バトントワリングには数百種類のワザがありますが振り付けは自由で、先生と相談しながら、付けていきます」

競技は、個人と団体に分かれ、個人では1曲につき1分30秒。団体では、3〜4分。種目数も多く、ご存じの方も多いだろうが、男子の部もあるという。「男子は、女の姉妹がやっているから、という理由での始め方が多いですね。10点満点の持ち点でスタートし、減点法で点数が決まります」

バトントワリング競技において求められる特質は一体なんだろう。

「やはりパワーと度胸です。フィギュア・スケートと同様、見栄えの良さが要求されます。それと、両手で操るバトンの技術との相乗効果で点数が決まります」

器用さと度胸の良さ、それに運動神経が総合して、競技は完成される。

「勿論これは競技のときで、普段はイベントのパレードで先頭を受け持っています」

我々がしばしば目にする光景である。こういう場面で、大いに花を添え、盛り立てる役割を担っている。

「それからエキジビションも大事なお仕事。フィギュア・スケートでもありますよね。イベントの途中でバトントワリングの演技を、お客様に見せるのです」

盛大な拍手を送られると嬉しい。あんなこと、とても自分にはできないという表情で、お客さんは驚嘆して見ている。

「将来は体育教師を目指しています。そして後進の指導に当たりたいです。負けず嫌いだからゼツタイ実現させます」

国際競技で世界中を廻る。練習も激しい。学業との両立はたいへんだろうが、貫き通して欲しい。

「対抗勢はオーストラリアとかカナダ、それにフランス。そういう国が強いんです。アジアはまだ、少ないですね」

両手の親指と人差し指の間に、それぞれ硬いタコが出来ている。これまでの精進の、これが結果だろう。手は大きいほど、良いのだという。

「片手でバトンを上放り、それを受け止めてクルクルと回します。これを二日千回繰り返すのです。右手と左手の両方で」

……頑張ってください。

